

外国語教育と待遇表現——朝鮮語・フランス語——

曾我祐典

0. はじめに

外国語教育（「聞く、話す、読む、書く」のすべての面にわたるコミュニケーション能力の養成をめざす教育）においては、当該言語の文法・語法にてらして「正しい」文を構成する能力の養成をはかるだけでは十分でない。教授プログラムは、学生が当該言語を用いる社会における言語活動の基本的なルールを身につけることができるようにも構想されていなければならない。実際、学習者が当該言語によるコミュニケーション主体として相手に受け入れられるようになるためには、言い換えれば、正常なコミュニケーションが成立するようになるためには、コミュニケーションの性格にてらして、またコミュニケーションの相手や言及する人物・事物との関係にてらして「適切な」文を構成する能力を身につけることが不可欠である。

発話者がコミュニケーションの場面の性格を考慮しつつ、相手や言及対象の人物・事物との関係に応じて選択する表現形式は、「敬語」または「待遇表現」と呼ぶことが多い。コミュニケーションの場で相手や言及対象をどのように待遇するかという言語行動に関心を寄せる本稿では、広い範囲をカバーする用語と考えられる「待遇表現」の方を使うことにする。

外国語としての日本語の教育においては、日本社会の構成員がもつ待遇行動意識・待遇表現観も手伝って、菊池(1994)や国立国語研究所(1992)が巻末に掲げる参考文献表が示すように、また多くの教材にうかがえるように、初級の段階から待遇表現が重要視されている。しかし、日本の大学で行なわれている初級外国語教育においては、一般に、その重要性に見合うだけの扱いをしていないのが実情である。もちろん、事情は言語によってかなり異なるようで、たとえば、これまで筆者がたずさわってきたフランス語教育¹⁾と数年前から関わるようになった朝鮮語教育²⁾を比べても、両者のあいだには大きな差異があって同列に論じることはできない。

以下では、まずコミュニケーションにおける待遇表現の重要性を確認し(1)、そのあと朝鮮語の場合(2)とフランス語の場合(3)について初級レベルにおける待遇表現の教授法について考えることにしたい。

1. 待遇表現の重要性

1.1 コミュニケーションの場と待遇表現

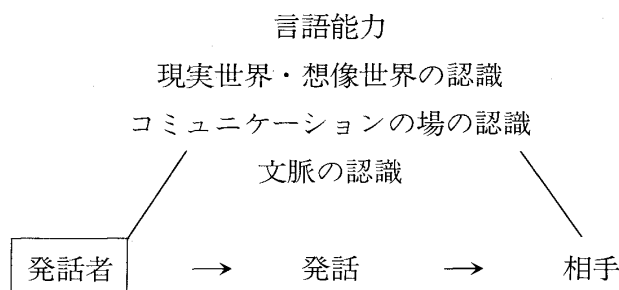
ここでは、一般にコミュニケーションにおいて待遇表現がどのような位置を占めているかを確認しておきたい。そのためには、曾我(1992)に示したコミュニケーションの場の構成(pp.18-19)を待遇表現とのかかわりにおいて見ておくとよいだろう。

1. まず発話者がいるが、発話者は、原則として自分とは異なるだれかをコミュニケーションの相手としてもっている。発話者は、なんらかの言語知識・言語活動能力をもっており、その

言語能力を少なくとも部分的には相手が共有していると考えている。また、発話者は、自分と相手の言語知識・言語活動能力について、なんらかの評価をくだしている。

2. 発話者は、自分を取りまく世界（地理的・空間的に、歴史的・時間的に、知的・情意的に、文化的・社会的に自分を取りまく世界）についての認識・感覚をもっており、さらに、豊かな想像世界をもっている。そして、そのようなものを少なくとも部分的には相手が共有していると考えている。
3. 発話者には、その場面の社会的・文化的・心理的性格や相手との社会的・心理的關係その他さまざまな要因を含むコミュニケーションの場についての総合的な認識がある。そして、その認識を少なくとも部分的にはコミュニケーションの相手が共有していると考えている。
4. 発話者にはまた、過去においてまたはその場面で相手と交わした言葉・話の流れといった、文脈についての総合的な認識がある。そして、その認識を少なくとも部分的には相手が共有していると考えている。
5. 発話者は、このような基盤に立って、相手になんらかの働きかけをする欲求を抱いている。この伝達欲求は、人間の存在・生活・社会の複雑さを反映してきわめて多様であるが、たとえば、なんらかの意味での行動の要請、なんらかの意味での情報の提供、なんらかの意味での情報提供の要請などをその主なものと認めることができよう。発話者は、さまざまな伝達欲求を満たすために、ある瞬間に現実世界または想像世界のなんらかの事柄に言及する、なんらかのタイプの発話を構成して相手に伝えようとする発話意図をもつ。

以上を図式的に示すと次のようになるだろう：



伝達欲求>発話意図

待遇表現がコミュニケーションにおいて果たす役割にとくに関わりが深いのは、上の3と5であろう。すなわち、発話者が、コミュニケーションの場の社会的・文化的・心理的性格や相手との社会的・心理的關係についてなんらかの認識をもって、伝達欲求を満たすためになんらかの事柄に言及するなんらかのタイプの発話を構成して相手に伝えようとする発話意図をもつという点であろう。このことを踏まえて待遇表現を考えると、「コミュニケーションの場面の性格を考慮しつつ、相手や言及対象の人物・事物との関係に応じて選択する表現形式」という簡潔な言い方の裏に複雑な事象がひそんでいることがはっきりしてくる。

1.2 待遇表現の機能

待遇表現を機能面から定義しようとする際には、しばしば、「人間関係をスムーズに保つための

言語的手段」(国立国語研究所 1990、p.2)のような抽象的な言い方がなされる。「待遇表現の対照研究のためには、待遇表現がどういう機能を持っているか、その機能にさかのぼり、それを具現する言語表現すべてを待遇表現とし、待遇表現の枠組みを考え直すことが必要であろう」としている井出(1990、p.149)も、おもに日本語と英語を念頭において、「円滑なコミュニケーションのための適切な言語使用」という定義にとどめている(p.150)。日本語について待遇表現の一部としての敬語を「同じ事柄を述べるのに、述べ方を変えることによって敬意あるいは丁寧さを表す、そのための専用の表現である」(p.72)としている菊池(1994)も、「基本的には同じ意味のことを述べるのに、話題の人物／聞手／場面などを顧慮し、それに応じて複数の表現を使い分けるとき、それらの表現を待遇表現という」と定義するにとどまる(p.21)。このような抽象的な言い方になっているのは、待遇表現の機能をどのような観点からどのような用語法によって規定するかが、それ自体すでに大きな問題であって専門家のあいだでなお考究が続いていることによると思われる。

外国語教授法の枠組みの中で待遇表現の問題を考える本稿では、待遇表現を、より具体的に「発話者がコミュニケーション場面の性格を考慮しつつ、自分と相手との関係(とくに社会的・心理的距離)および自分と言及対象の人物・事物との関係(とくに社会的・心理的距離)をどのようなものととらえているかを示すために用いる表現形式」としておくのが適当であろう。

このような機能をもつ待遇表現を学生が身につけるにいたらなかった場合には、コミュニケーションの場において、たとえば自分と相手の関係に適合する表現形式を用いることができないために、結局は伝達欲求を満たせないままに終わってしまうおそれが十分にある。日本社会において、社会的・心理的に「適切さを欠く」言葉づかいがしばしばさまざまな不都合を生む事実を引合いに出すまでもなく、待遇表現を初級段階から重要な学習項目として設定すべきことは明らかであろう。日本の大学における外国語とくにヨーロッパ語の教育では、この点についての配慮が欠けているように思われる。そのことを、次に見る朝鮮語教育の場合と対照しながら、とくにフランス語教育の場合について検討しよう。

2. 朝鮮語教育の場合

2.1 朝鮮語社会の待遇表現

ここでは、YOON, A. (1989)、梅田博之(1974)、国立国語研究所(1990)、韓美卿(1988)などを参考に、朝鮮語を用いる社会、とくに韓国社会における待遇表現を概観することにしよう。

朝鮮語によるコミュニケーションにおける待遇表現の選択メカニズムは、日本語によるコミュニケーションの場合と多くの共通点があるが、同時にいくつかの重要な差異も認められる。以下では、相手との関係に応じて選択する表現形式(「相手待遇表現³⁾」と呼ぶことにする)と、言及する人物・事物に関して用いる表現形式(「言及対象待遇表現⁴⁾」と呼ぶことにする)を順に見ていこう。言うまでもなく、言及対象の人物が発話者自身であったりコミュニケーションの相手であったりすることは、少しも珍しいことではない。

2.1.1 相手待遇表現

相手待遇表現は、動詞・形容詞・存在詞・指示詞にともなう形態素による6種類の言葉づかいの

スタイルを含む複雑な体系をなしている。まず、相手を上位者として扱う場合の「尊称形」と呼ばれるものがあり、これは「上称形」と「中称形」という2つのスタイルに分けることができる。相手を等位者または下位者として扱う場合には「等称形」「下称形」というスタイルを用いる。さらに、上下関係にともなう堅苦しさを避けるときには、「略待丁寧形」「略待普通形」というスタイルを用いる。

「上称形」は、あらたまったスタイルで、社会的・心理的距離の大きい上位者に対して、また未知の成人のあいだでよく用いる。ただし、女性は非常にあらたまった場面でなければ用いない。

「中称形」は、-oとその弱まった形である-uの2種類の形態素によるスタイルで、おもに中年以上の男性がやや形式ばった感じをともなう-oを用いる一方、中年女性がやわらかい感じをともなう-uを用いる傾向がある。中年以上の男性の場合、たとえば、自分より年下だがある程度の社会的地位をもっている相手や、自分より地位は低いが年長である相手などに対して用いる。より若い世代は、親しい親戚の年長者や大学の上級生などに対して用いることがある。

「等称形」は、中年以上の男性が、下位者ではあるが子供あつかいはできない他人に対して用いる。また、成人の親しい友人同士のあいだでも、「下称形」の代わりとして用いる。

「下称形」は、ふつう成人が中学生以下の子供に対して（親は年齢にかかわらず子に対して）用いる。また、新聞・雑誌や学術論文などにも用いる。

「略待丁寧形」は、本来、相手との関係・距離に関しては中立的なスタイルであり、相手との関係・距離を明確に表現したくない場合や、「上称形」にともなう堅苦しさを避けたいと思う場合などに用いることができる。実際、「上称形」を用いても自然な上位者に対して堅苦しくない言葉づかいをする場面で広く用いている。女性は、男性が「上称形」を用いる場面の多くにおいて、このスタイルを用いる。下位者ではあるが社会的・心理的距離を大きく保ちたい相手に対しても用いる。

「略待普通形」は、相手が上位者ではあっても親愛の気持ちをこめて話すような場面で用いる。また、等位者または下位者ではあっても社会的・心理的距離を保ちたい相手に対しても用いる。

以上のことから、成人の日常的な言語生活では、多くの場面で「上称形」と「略待丁寧形」とを併用することが多く、若い世代にかぎれば、社会生活においてこれら2つのスタイルをもっともよく用いると言ってよい。

2.1.2 言及対象待遇表現

言及対象待遇表現のほうは、名詞・動詞・発話者と相手の呼称・助詞などの語彙要素や動詞・形容詞にともなう形態素-siなどによるものがある。

名詞は、irum「名前」に対する sonham「御尊名」、nai「年齢」に対する yonse「お年」、pap「飯」に対する chinji「お食事」などいくつかのものに限られている。

動詞も、mokta「食べる」に対する chapsusida「召し上がる」や chada「眠る」に対する chumusida「お休みになる」などいくつかのものに限られている。

発話者と相手の呼称も、日本語に比べれば少ない。発話者を指すのは、naと上位者の前で用いる choである。相手の呼称としては、tangsin や no のような用法の狭いものの他に、日本語の場合と同じように相手の地位を示す表現などを用いる。

助詞は、i, ga「～が」に対する keso や ege「～に」に対する ke のような「敬語形」がある。

動詞・形容詞にともなう形態素 -si は、言及する人物に対する敬意を示す場面で広く用いる。

2.1.3 関係・距離の認識に関与するファクター

朝鮮語社会では、言及対象の第三者よりコミュニケーションの相手が上位者である場合に言及対象待遇表現をつつしむこともあるが⁵⁾、相手との関係にかかわらず一定の言及対象待遇表現を使う「絶対待遇」の傾向が強い。すなわち、相手が自分より上位者である社会生活の場面において、しばしば発話者は相手との関係よりも自分と言及対象の人物とのあいだの関係に応じて言及対象待遇表現を選択する。たとえば、言及対象の人物が発話者の身内であって相手が上位者である場合、自分にとって尊重すべき人物として一貫して abonim-i 「お父様が」のような言い方をするのがふつうである。これは、コミュニケーションの相手を上位者として待遇するような場面はあらたまった場面ということになり、そこでは、言及対象の第三者についてもそれだけきちんとした言葉づかいをしなければならないという感覚が働きやすいからであろう。一方、言及対象が子供である場合には、たとえ上位者である相手の子であっても一般に下位者として扱う。

朝鮮語社会では、自分と言及対象との関係に応じて発話者が待遇表現を選択する傾向が強いわけで、この点は、相手との関係により重点をおく日本語の表現とは大きく異なる。

ほかにも日本社会との相違点としては、自分と相手または言及対象との関係・距離の認識において年齢というファクターがより重要な役割を演じることが指摘できる。たとえば、日本の大学では上級生を上位者として扱うが1、2歳年長でも同級生なら対等に扱うことが多い。しかし、韓国の大学では上級生ほどでないにしても1歳でも年長なら上位者として扱う傾向が見られる。また、相手がかんりの年長者の場合、日本語では相手との親疎関係によって待遇表現が大きく変わるのに対して、朝鮮語では親疎関係はそれほど影響しないという事実も指摘できる。

上に見たとおり、女性は男性より堅苦しさの少ない表現を選ぶ傾向が見られる。しかし、朝鮮語にはもともと「お庭」「お手紙」の類の美化語が珍しく、「～だわ」「～なのよ」といった種類のいわゆる「女ことば」は無いと言ってよい。

2.2 朝鮮語教育における待遇表現

それでは、初級朝鮮語教育においては、待遇表現はどのように扱われているだろうか。われわれが検討した大学用教科書は、ほとんどが相手待遇表現としては「上称形」と「略待丁寧形」を中心に扱っており、言及対象待遇表現としては基本的なものを教えている。

たとえば、岡山(1994)では、第16課(全体は21課)で学習事項として「敬語文」(上称形)、「敬語の会話体」(略待丁寧形)、「単語自体で尊敬の意味をもつ尊敬語(体言、用言、助詞)」「敬語の現在・過去連体形」を設けている。そして、コラムで「朝鮮語では身内の人にも敬語表現を用いる場合がある」としている。

菅野裕臣(1992)は、「文法と作文」という副題が示すように日本語の単文に対応する朝鮮語文を書く練習を通じて基本的な文法知識を身につけさせようとするものである。「朴博士は今日お宅にいらっしやいます」(p.52)や「すみませんが、ちょっとおたずねします」(p.92)といった日本語文にしばしば待遇表現が含まれていることから、朝鮮語における同様の事象に学習者の注意が自然に

向くという効果が期待できる。

徐向揆(1992)は「会話編」という副題が示すとおり、韓国の大学生が日常生活で用いそうな表現を提示している。主人公と友人のあいだの会話が多く、教師以外にはあらたまった言葉づかいをすべき相手がほとんど登場しないために多様性に欠けるが、それぞれの場面において適切な言葉づかいが示されていることは確かである。

高島淑郎(1993)では、第16課(全体は24課)で「上称形」を、第20課で「略待上称形」を教えている。その他の課(とくに第19課、第22課)でも、尊敬をこめて年齢を言う方法など待遇表現を適宜示している。

塚本勲他(1989)は、「会話と文法」にあてた16の課で随所に待遇表現を提示している(pp. 45, 49, 86, 92, etc.)。また、よりていねいな言葉づかいの文に書き換える練習も何箇所かに設けていることから、学習者が待遇表現の問題を意識するようになることが期待できる。

野間(1988)は初級・中級用だけあって、本文16課(180p.)に加えて行き届いた語彙や文法のページ(60p.)を含んでいる教科書である。本文の後半部(13課)で「下称形」も導入しているが、本稿では、初級教育に話を限っているので、前半部だけを考慮に入れる。最初に待遇表現が取り上げられるのは、冒頭の「朝鮮語とはどういう言語か」という説明の中で、「かなり複雑な敬語の体系が存在する。目上に向かって言うのか、目下に向かって言うのかなどが、特に用言の変化の体系にはっきりと現われている」とある(p.4)。そして、第4課で「日本語の『です・ます体』と『だ・である体』にあたる言い方が朝鮮語にもある。前者の丁寧な言い方にあたるものを上称形といい、後者の丁寧でない言い方にあたるものを下称形という。(…)以後、まず上称形を学び、13-1 から徐々に下称形も学んでゆく。なお、朝鮮語には上称形と下称形の間位置する中称形・等称形と呼ばれる言い方もあるけれども初心者はとりあえず考えに入れなくてよい」と説明している(p.37)。以後、日本語文を添えて文例を提示することによって、学生がそれと意識しながら待遇表現に接していくことができるようになっている。

文(1992)は、「基礎編」10課(60p.)と「応用読解編」22課(50p.)から成っているが、「語学学習を通した韓国人と韓国社会の理解ということに私なりに気を配った」と序文に記すだけあって基礎編に「敬語表現」と題する第7課があり、「上称形」と「略待丁寧形」の対話に「敬語表現の接辞」と「特殊な敬語表現(尊称語)」などの解説を添えている。そこでは、「儒教的伝統がいまだ根強い韓国・朝鮮社会では、会話表現においても上下の関係を重んじ、日本とは違って身内であっても目上の者に対しては敬語表現を用いる」という記述がある(p.43)。

油谷(1988)では、第9課(全体は20課)で学習事項として「尊敬の補助語幹-si」、「特殊な敬語形(体言、用言、副詞、謙讓語、美化語)」を設けている。そして、第12課で「対者待遇の区分」を設けて6種類の言葉づかいのスタイルがあることを述べたあと、「略待丁寧形」と「略待普通形」をやや詳しく紹介している(pp.74-75)。さらに、第17課～第20課では「下称形」のテキストと手紙文を示している。

油谷(1993)は、序文にあるように、「第2外国語あるいは単位外の外国語として、1週間に1コマ(90分)しか割り当てられていない場合、1年間で消化」できるよう配慮したもので、第8課(全体は15課)で学習事項として「尊敬の補助語幹-si」を設けている。そして、第11課で「下称平叙文」を設けて「下称とは最もぞんざいな終結語尾であり、地の文や子供に対して用いられる」

という説明を加えている。「略待丁寧形」は扱っていない。

上の2. 1で見たように、成人とくに若い世代は、社会生活において相手待遇表現として「上称形」と「略待丁寧形」をもっともよく用いる。したがって、初級教育においてはこれら2つのスタイルが使えるように、そして「下称形」と「略待普通形」が理解できるように教授プログラムを構想することが望ましい。

われわれが検討した大学用教科書からは、朝鮮語教育において待遇表現が初級段階から相当に重要視されていると言える。これは、学生がいずれ体験することになる朝鮮語によるコミュニケーションにおける相手の「適切な言語行動・言葉づかいについての要求水準・期待水準」が（相手の社会と日本社会の文化的近似性からして）かなり高いものであることを考えると、妥当な方針であると思われる。

ただし、現行の教科書が想定している授業が所期の目標を達成するために効果的であるかどうかは検討の余地がある⁶⁾。たとえば、「上称形」と「略待丁寧形」を使う能力をよりよく身につけさせるためには、授業の一部をコミュニカティブ・アプローチによる学習作業とするなどの改良を加える必要があるだろう。

3. フランス語教育の場合

3.1 フランス語社会の待遇表現

ここでは、世界のさまざまなフランス語社会のうちもっとも規模の大きいフランス社会を考察の対象とする。われわれ自身のフランス社会における言語活動の観察からも、数次にわたってパリで行なった面接調査⁷⁾からも、フランス社会における人間関係の複雑さまたは細やかさの度合と待遇表現の使用は日本社会と同程度であると考えてよい。このことの傍証として、マナー・礼儀作法の多種多様なマニュアルが言葉づかいに多くのページを割いていることや、手紙の書き方・言葉づかいを教える書物が数多く出版されていることなどを挙げることもできよう。

もっとも、コミュニケーションに際して、フランス人の大多数がさまざまな待遇表現使用を常にはっきりそれと意識して行なっているとは言えないかもしれない。多くの場合、少なくとも日本社会ほどには待遇表現使用をはっきりそれと意識していないようにわれわれには見受けられる。言語学の領域においても、われわれの知るかぎり、フランスで待遇表現を総体的に論じた研究としてはYOON(1989)しか無く、フランス言語学は待遇表現を研究対象としてこれまでほとんど取り上げてこなかったと言える。このように、フランス人とフランス言語学が待遇表現に関してあまり問題意識を抱かないままきたとすれば、それは、フランス語において待遇表現専用の語彙要素・文法形式がごく稀であるという事実由来するであろう。そのために、語彙体系・文法体系といった「ハード」を主要対象とする伝統的な言語学研究においては問題にされなかったのである。言語学が言語活動・言語使用の諸側面といった「ソフト」を重要な研究対象とするようになったのは比較的最近のことであるにすぎない。

フランス語の待遇表現は、日本語や朝鮮語のような専用の形式はごく限られているのであって、

日本語・中国語・英語の待遇表現を比較対照した井出祥子他(1994)にいうところの「ストラテジー型」なのである。言い換えれば、フランス語によるコミュニケーションにおいて、発話者は日本語と同じような頻度で待遇表現を用いるのであるが、ほとんどの場合、それらの表現形式は待遇表現として固定されたものではない。いわば、さまざまな「汎用の」表現形式を待遇表現としてさかんに利用しているわけである。したがって、朝鮮語について行なったように、コミュニケーションの場や文脈と切り離して相手待遇表現と言及対象待遇表現を列挙しようとするのはほとんど無意味である。以下では、重要と思われるいくつかの場合について、「発話者がコミュニケーション場面の性格を考慮しつつ、自分と相手との関係（社会的・心理的距離）および自分と言及対象の人物・事物との関係（社会的・心理的距離）をどのようなものととらえているかを示すために用いる表現形式」を見ていこう。とくに相手との関係・距離が問題になりやすいと考えられる、伝達意図が「行動要請」である場合とそれ以外である場合とに分けて検討していくことにしよう。

3.1.1 相手に行動を要請する場合

なんらかの行動を要請しようとして相手に働きかける場合を、相手との社会的・心理的距離の大小によって、3つの場合に分けて考えることにしよう。ここで問題にするのは、フランス社会において定まっているものとしての距離の大小ではなく、あくまでも発話者が相手をどのように待遇しようとするかという観点、発話者の意図・選択という観点から見た距離の大小である。

A. 社会的・心理的距離が小さい相手として扱う場合

フランス社会の場合も、発話者が身近に感じる相手としてまず考えられるのは、家族や親しい友人であり、次が、職場の親しい同僚や学校のクラスメートなどであろう。相手を自分にとって社会的・心理的距離が小さい人物として扱う場合は、人称代名詞 *tu* を用いて呼ぶのがふつうである。たとえば、親が子に行動を指示したり、友人や親しい同僚のあいだで相手に行動を促したりするときは、しばしば命令形を用いて次のような言い方をする。

Va te laver les mains!

「手を洗っておいで」

C'est toi qui l'as peint? Fais voir!

「それを描いたのは君なの？見せて」

職場を同じくする者同士であっても、一般に上司と部下のあいだでは力関係があるために同僚同士の場合よりは距離を意識するものであり、その表れの一つとして、たがいに人称代名詞 *vous* を用いることが指摘できる。もちろん、発話者が上司であるときは、上位者であることによって、しばしば部下に対してあまり距離を意識しないという態度で発言することもできる⁸⁾。ここでは、オフィスにおいて課長が部下の事務員に仕事上の指示を与える場面を想定しよう。自分の指示を相手が実行して当然という態度で、命令形を使うことが考えられる。

Répondez à cette lettre tout de suite!

「すぐにこの手紙に返事をして／しなさい」

また、動詞 *vouloir* を使うことも考えられる。

Voulez-vous répondre à cette lettre tout de suite?

「すぐこの手紙に返事をしてくれないか／してくれますか」

これは、いちおう相手の欲求・意欲をたずねる疑問文の形をしている。すなわち発話者は、理論上は non 「いいえ」の返事も容認するという姿勢で発言しているわけで、その分だけ相手を尊重することになる。もちろん実際には、部下が上司に向かって「それをする欲求・意欲はない」と答える自由などほとんど無いだろうが。

高校や大学などでも、教員と生徒・学生とのあいだにはおそらく「恩恵の授受」にもとづくある種の力関係があるためになんらかの距離を意識するものであり、たがいに vous で呼びあうのがふつうである。教員が生徒・学生に指示を与えるときは、一般に上位者であることによって、相手に対してあまり距離を意識せず、自分の指示を相手が実行することが（相手の利益になると想定しているだけに）当然という態度で命令形を用いる。

Lisez ce chapitre chez vous!

「家でこの章を読みなさい」

B. 社会的・心理的距離が多少ある相手として扱う場合

同じ行動要請でも、相手がそれほど親しくなく、ある程度の距離を意識する知り合いであるような場面では、用いる表現形式が異なる。たとえば、ときどきフランス語について知恵を借りることのあるやや遠い知り合いの好意に訴えて翻訳をしてもらおうとする場面を考えよう。このような場面では、まず最初に依頼をするにいたった事情説明などなんらかの前置きをしておいてから本題に入るといったやりかたが多い。行動要請そのものは、たとえば動詞 pouvoir を使って行なうことが考えられる。

Pouvez-vous traduire le mode d'emploi en français?

「使用説明書をフランス語に訳してもらえますか」

これは、「翻訳することができるか」という、可能性をたずねる疑問文の形をしている。上で見た vouloir による要請の文に比べて、相手にとって否定的回答をすることがより容易な形式である。要請を断わることが、「翻訳することは、(自分としては欲求・意欲はある。しかし、たとえば時間的余裕がない、必要な資料が無いなど) 状況が許さないために可能でない」といったような、自分の意志とは無縁の事情に起因するという形で行えるからである。行動要請のための表現法としては、相手に与える心理的負担が比較的軽いということになり、フランス人が個人的な依頼をする場面で多用するのも理解できる。

こんどは、喫茶店やレストランで客がウェイトーに行動を要請する場面を考えてみよう。注文をするときは、Un thé au lait, s'il vous plaît. 「ミルクティーひとつお願い」のような簡潔な言いかたをするのが一般的であるが、それ以外に、たとえば菓をのむために特別に水をもってきてもらおうとするようなときは、しばしばウェイトーの仕事を少し逸脱した個人的な依頼と見なして、pouvoir を用いて表すことが考えられる⁹⁾。

Vous pouvez me donner un verre d'eau, s'il vous plaît?

Est-ce que vous pouvez me donner un verre d'eau, s'il vous plaît?

「水を一杯もらえますか」

上で述べたように、職場の上司と部下のあいだには本来ある程度の距離が設定されている。そして、フランス社会においても日本社会と同様の人間関係の複雑さまたは細やかさが見られるのであり、上司が自分の指示を快く受け入れてもらうために、部下をやや尊重する姿勢で発言することは少しも珍しくない。

Pouvez-vous répondre à cette lettre tout de suite?

「すぐこの手紙に返事をしてもらえますか」

相手が家族や親しい友人のようなごく身近な人物である場合でも、行動要請を快く受諾してもらおうとして相手をやや尊重する姿勢を示すために、(臨時に) ある程度の距離がある相手に対する言葉づかい(たとえば、vouloir や pouvoir を使う疑問文の構成)をすることがある。

Papa, tu veux m'acheter un vélo?

「お父さん、自転車買ってちょうだい」

Dis, est-ce que tu peux m'aider à traduire ce roman en français?

「ねえ、この小説をフランス語に訳すのを手伝ってもらえるかな」

C. 社会的・心理的距離が大きい相手として扱う場合

相手が社会的上位者としてはっきり意識されるような場合には、一般に発話者は相手の意向や状況に配慮しながら話すものである。たとえば、会社員が上司や取引先の人物になにかを要請するような場面などでは、まず前置きとして次のような、vouloir の半過去形や venir の大過去形を含む発話(表面上は伝達意図が情報提供であるかのような形の発話)を構成するのが観察される。

Je voulais vous demander quelque chose.

「お願いしたいことがあるんですが」

J'étais venu voir Monsieur le Président.

「会長にお目にかかるために参ったのですが」

また、上で見たのと同様の翻訳の依頼でも、遠い知り合いに対して行なうような場合には、かなりの距離のある相手として待遇しようとして、動詞 pouvoir の条件法現在形や非人称構文による表現法を用いることが考えられる。

Pourriez-vous traduire le mode d'emploi en français?

Vous serait-il possible de traduire le mode d'emploi en français?

「使用説明書をフランス語に訳していただけますか」

上司でも、ときには、自分の指示を快く受け入れてもらおうとして、部下を非常に尊重する姿勢で発言することもある。

Pourriez-vous répondre à cette lettre tout de suite?

「すぐこの手紙に返事をしてもらえませんか」

3.1.2 その他の伝達意図の場合

たとえば、伝達意図が情報提供である場合について考えよう。相手との社会的・心理的距離が意識されるような場合には、発話者はしばしば事柄をはっきり事実として提示するのを避けて語調を緩和することがある。断定を避けるのに役立つ表現形式としては、*peut-être*, *sans doute* 「もしかすると、おそらく」のようなモダリティの副詞を挙げることができる。また、「...ではないかと思います」のように、自分の個人的な判断（すなわち、誤っている可能性が十分にある判断）の対象として言及事態を提示することもあり、そのときは、*croire* 「思う、気がする、信じる」、*penser* 「思う、考える」、*il me semble* 「...と思われる、見える」のような表現形式をよく用いる。

Je crois que c'est une très bonne méthode.

「とても良い方法だと思います」

Je pense que je dois partir.

「おいとましなければと思います」

Il me semble que c'est une conférence peu banale.

「どうやらめったにない講演だと思われます」

実際には、相手が比較的身近な友人などであっても、相手に迷惑をかけているのではないかと慮んばかりの姿勢を示すようなときには、すなわち（臨時に）相手を距離の大きい人物として扱うときには、たとえば半過去形を用いることがある。

Je t'appelais pour te demander quelque chose.

「聞きたいことがあって電話したんだけど」

同様に相手が比較的身近な場合でも、相手の意向を尊重するという姿勢で、自分の欲求・意欲や提案を伝えようとする場面では、距離を意識することになって次のように言うことが考えられる。

Je voudrais en discuter avec toi la semaine prochaine.

「来週それについて話しあいたいんだけど」

Nous pourrions rédiger le rapport ensemble.

「いっしょに報告書を書くのはどうだろう」

また一般に、相手を尊重する姿勢を示そうとしてことさら相手に言及するように努めることもある。これは、発言内容に相手の興味を引きつけるのにも役立つ。

Comme vous ne l'ignorez pas, nous reprendrons dès septembre.

「ご存知のとおり、9月からさっそく再開します」

さらに、相手を話題の中心とする（その分だけ発話者が後退する）ように努めることもある。たとえば、*Le journal vous tiendra au courant de nos projets.* 「本誌は計画をお知らせします」のような言い方をする代わりに「(読者である) あなたは……」という表現法を用いたり、著書を贈られたときの感謝の言葉として「私は感謝する」という言い方の代わりに「あなたの本は……」

という表現法を採ることもある。

Vous serez tenu au courant de nos projets par le journal.

「あなたは本誌により計画を知らされます」

Votre beau livre m'a fait grand plaisir.

「あなたの素晴らしい本は私に喜びを与えました」

こんどは、伝達意図が情報提供の要請である場合を考えよう。たとえば、来客が冷たいものを欲しているかどうか知りたいというような場面で、社会的・心理的距離が小さい相手に、*Tu veux un rafraîchissement?* 「冷たいもの欲しい？」のように言うことはもちろん自然である。しかし、ある程度以上の距離を意識する相手であるときには、このような質問は適切でない（日本語でも相手によっては、「冷たいもの欲しいですか」は不適切で、代わりに「冷たいものいかがですか」のようなたずね方をする）。その理由としてまず考えられるのは、相手の欲求そのものに触れることはぶしつけと感じられるということである。また、相手の欲求そのものをたずねるのは、多くの場合、相手に恩恵を与える立場からの行為であるために、自分が上位者であるかのような印象を与えかねないということも指摘できる。そこで、ある程度以上の距離を意識する相手の欲求を知りたい場面では、たとえば次のような許可を求める言い方が用いられることがある。

Puis-je vous proposer un rafraîchissement?

「冷たいお飲物を差し上げてよろしいでしょうか」

3.1.3 関係・距離の認識に関与するファクター

以上見てきたように、フランス社会においても待遇表現の使用はさかんである。自分と相手との関係・距離の認識において、年齢というファクターは、日本社会に比べればたいして重要な役割を演じていないと言えそうである。たとえば、同僚同士なら10歳程度の差までは無視されることも珍しくない。一般に、地位や職階といった社会的な力関係がもっとも重要なファクターであるようだが、親疎関係も待遇表現の選択に大きな影響を及ぼしている。

注意深く観察すると、女性の言葉づかいと男性の言葉づかいのあいだにはかなりの差異が認められる。たとえば女性に対して男性に対する以上にいわゆる上品な話し方が期待または要求されるのは、日本社会と変わらない。男性が *J'ai fait une connerie*. 「ばかなことをしでかした」と言ってなんら差し支えない場面で、しばしば女性は *J'ai fait une bêtise*. と言うことが期待されるのである。また、男性が *ma mère* 「母が」と言うことが適切とされる場面の一部において、女性は *maman* 「お母さんが」と言うことが容認または奨励されるような例も見られる。男性は日本と同じように高校や大学で知り合った同性の友人を姓で呼ぶことがあるが、女性は同性の友人を姓で呼ぶことがまずない。このように、伝統的な性差意識はかなり根強く残っていて、言葉づかいに反映していると言える。

3.2 フランス語教育における待遇表現

それでは、大学1年次のフランス語教育においては、待遇表現はどのように扱われているだろうか。日本の大学に多く見られる週2コマの授業体制を念頭において、「従来型」と「コミュニケー

ション型」の2つに大別して考察しよう。

「従来型」は多数派であり、多くの場合、1コマを「文法」の授業に、もう1コマを「講読」の授業に当てている。「講読」の素材としては、以前は文化的・文学的性格をもつ平易な文章が一般的であったが、近年は話しことば（対話）を多く含む日常的性格の読み物の比重が増してきている。文法授業用にせよ講読授業用にせよ、全国の大学で用いられている教材は膨大な数にのぼり、個々のものに即して論じることはできない。全体を概観して言えるのは、待遇表現をそれとして扱うことが行なわれていないということである。「従来型」のフランス語教育では、おもに文法カテゴリ一別に表現形式を提示してその用法を説明するという方式を採用していることを考えれば、発話者が「関係・距離をどのようなものととらえているかを示す」ための表現をそれとして扱うことがないのは当然であることになる。

結果として、「文法」の授業では、人称代名詞の tu と vous を教える際に「親疎によって両者を使い分ける」という趣旨の簡単な説明をするのと、条件法現在形・条件法過去形を教える際に「語調緩和」の用例を示すにとどまるようだ。

また、「講読」の授業では、おもに対話を読む際に学習者はフランス社会におけるさまざまな言葉づかいの一部に触れるわけであるが、待遇表現に関して十分に多様性をそなえた教材は見られない。それでもビデオ教材の場合には、映像の助けもあって、学習者はかなり微妙な待遇表現にまで触れることができるだろう。しかし、かりに素材が豊かであっても、それに単に触れるだけではどのような機能をもつ待遇表現であるか判別できないし、まして、自分がそれを使いこなせるようにはならない。

「コミュニケーション型」は、「聞く、話す、読む、書く」のすべての面にわたるコミュニケーション能力の養成をめざす教育であって、現在のところ少数派であるが次第に実践する教員が増えてきている。これまで日本で作られ比較的広く使用されている大学用教材としては、石野好一氏他の『フランス語21 ―話す、読む、書く―』(1993)が代表的なものである。これは、教室で学生同士が実際にフランス語で基礎的なコミュニケーション活動をしながらか言語能力を身につけていくという、コミュニケーション・アプローチによる教育を行なうよう作られている。実用性を考慮して前半では互いに vous で呼びあう表現法だけを教えている。後半で、欲求を表したり (p.77)、意向を述べたりたずねたり (p.81)、依頼をしたりする (p.88) 場面の対話を練習する際に待遇表現を用いるが、学習者がはっきりそれと意識するようには構想されていない。その点、川合 Georgette 氏他のビデオ教材『モザイク Mosaïques』(1994)は、第1課からさまざまな人物同士で交わされる言葉について「親しい間柄のあいさつか親しくない間柄のあいさつか考えなさい」という問題を設けるなどして、人間関係と言葉について系統的ではないが考えさせる姿勢を打ち出している (pp.14, 47, etc.)。石野好一他(1993)は、改良の余地がある¹⁰⁾。

週2コマ体制での「コミュニケーション型」教育の場合、フランス社会においてどのような要因がどのような発話意図につながるかという言語習慣・言語戦略の学習は、総合能力を養成する「コミュニケーション授業」で行なうのが適当であろう。われわれは、文法教育はそのような授業を補完するものであり、「言及する事態の内容、伝えようとする内容に適合する発話を構成する能力の

養成」をめざし、「発話意図に適合する表現形式を選んでいく道筋、すなわち発話構成プロセス」を中心的な内容とするものであるべきだと考えている¹¹⁾。われわれの『ことばのしくみ フランス語』(1993)が待遇表現を扱っていないのはそのためである。

われわれの知るかぎり、初級フランス語教育においては、「従来型」であれ「コミュニケーション型」であれ、待遇表現は重視されていない。これは、待遇表現が文化的・社会的・心理的ファクターが関与するきわめて複雑な存在であるために、限られた授業時間の中では扱うのが難しいということにも由来する。

しかし、フランス社会においても日本社会におけると同様に複雑なまたは細やかな言葉づかいの配慮がなされていることを学習者に早い段階から教え、学習者の注意を喚起しておくことは必要である。中川努他(1991)の冒頭にあるような内容だけでも、学年の前半に扱うことは十分に可能であり、望ましいことである。

発話解釈(とくにテキスト読解)のための形態認定能力を養成することが中心であったかつてのフランス語教育とは異なり、コミュニケーション能力の基盤を作ろうとする初級教育においては、教員もフランス社会における待遇行動・待遇表現の使用に関して知識を深め、自分自身の感覚を育てておくことが望ましい。

4. おわりに

上の1では、コミュニケーションの場の構成要素を確認し、待遇表現を「発話者がコミュニケーション場面の性格を考慮しつつ、自分と相手との関係(とくに社会的・心理的距離)および自分と言及対象の人物・事物との関係(とくに社会的・心理的距離)をどのようなものととらえているかを示すために用いる表現形式」と規定した。

次いで2では、朝鮮語社会における待遇表現を相手待遇表現と言及対象待遇表現に分けて検討し、日本社会のそれとの類似点・相違点を見た。日本の大学における朝鮮語教育での扱い方をおもな教材に即して検討した結果、待遇表現が初級の段階から相当に重要視されていることが分かった。しかし、教科書が想定している授業が所期の目標を達成するために効果的であるかどうかは検討の余地がある。たとえば、「上称形」と「略待丁寧形」を使う能力をよりよく身につけさせるためには授業の一部をコミュニカティブ・アプローチによる学習作業とするなどの改良を加える必要があるだろう。

3では、フランス社会における待遇行動の研究が進んでいないことを指摘したあと、われわれの観察・調査にもとづいて、(自分と相手との関係・距離の認識に関与する要因は日本社会の場合とかなり異なるようだが)フランス社会でも待遇表現の使用がさかんであることを見た。大学の初級フランス語教育においては、「従来型」であれ「コミュニケーション型」であれ、待遇表現は重視されていない。学習者に早い段階から待遇表現の重要性を理解させ、基本的な感覚を養成するように授業をデザインする必要がある。そのためには、教員も日本社会と同様に変動しつつあるフランス社会における待遇行動・待遇表現に関して知識を深め、感覚を磨いていくよう努めることが望まれる。

langue という「ハード」だけでなくさまざまな場面におけるその使用という「ソフト」も教育の対象とするのは、外国語教育が言語活動能力の養成であることを考えれば当然のことである。待遇表現は、「ソフト」の重要な部分を成すものなのである。具体的にどのような教授法が効果的であるかを明らかにすることは、今後の研究課題としたい。

[注]

- 1) 筆者の専攻は言語学・フランス語学であり、教授法の分野では、おもにコミュニケーションのための文法教授プログラムの開発を行ってきた。関西学院大学総合教育研究室の助成金による研究としては、「一般教育課程におけるフランス語の総合的能力を養成する教授プログラムの研究」(1986~88年度、共同研究主任研究員)と「フランス語文法の教授プログラムの研究」(1991~92年度、共同研究主任研究員)がある。
- 2) おもに、関西学院大学のサークル「サランバン」における朝鮮語学習の指導と文学部開講朝鮮語授業の担当者に対する助言を行ってきた。また現在、総合教育研究室の助成金を得て、「朝鮮語運用能力を養成する教授プログラムの研究」(1994年度、共同研究主任研究員)を遂行中である。
- 3) 待遇表現の研究者の多くは「対者敬語」と呼んでいる。
- 4) 待遇表現の研究者の多くは「素材敬語」と呼んでいる。
- 5) たとえば、孫が祖父母を相手に自分の父に言及する場合や学生が教員を相手に上級生に言及する場合など。
- 6) われわれの共同研究の試作教材である曾我他(1994)も使用練習が不足しているなど、配慮がまだ十分でない。
- 7) インフォーマントは、国立科学研究センター研究員 Alain THOTE氏とマルヌ・ラ・ヴァレ大学助教授 Jean-Paul HONORE氏。
- 8) これは、警察のような職階制が明確な職場でとくに顕著であり、上司が年少の部下を tu で呼ぶ事例も観察される。
- 9) インフォーマントによれば、この場面では倒置疑問文 Pouvez-vous me donner...? はあまり自然ではない。「水をもらう」というごく日常的な事態には、倒置疑問がもつ「厳かさ、あらたまり」という響きが適合しないためであろう。なお、Est-ce que je peux avoir un verre d'eau, s'il vous plait? 「私は水を一杯手に入れることができますか」という表現法も頻繁に観察される。
- 10) 大学用の教科書ではないが、初級から中級に移る段階の学習者に向けて作られた中川努氏他の『コレクション・フランス語 4 話す』(1991)では、最初に待遇表現の問題に4ページを割いて(pp.8-11)、「tu と vous の使い分けの原則、特殊な場合、vous から tu への移行、相手の呼び方、ていねいさの度合い、親しさとていねいさ」などについて簡潔に説明している。
- 11) 曾我(1994)を参照。

[参考文献]

- 石野好一他(1993)：『フランス語21 一話す、読む、書く一』(大学用教科書)、白水社。
- 井出祥子(1990)：「待遇表現」、『講座 日本語と日本語教育12 言語学要説(下)』、明治書院、pp. 148-173。
- 井出祥子他(1994)：「敬語表現のタイポロジー」、『言語』23-9、pp.43-50。
- 梅田博之(1974)：「朝鮮語の敬語」、『敬語講座8 世界の敬語』、明治書院、pp.43-68。
- 岡山善一郎(1994)：『朝鮮語を学ぶ 初級編』(大学用教科書)、白帝社。
- 川合 Georgette(1994)：『モザイク Mosaïques』(大学用教科書)、大阪日仏文化センター。
- 川本茂雄(1974)：「フランス語の敬語」、『敬語講座8 世界の敬語』、明治書院、pp.191-203。
- 菅野裕臣(1992)：『基礎朝鮮語 一文法と作文一』(大学用教科書)、白帝社。
- 菊池康人(1994)：『敬語』、角川書店。
- 国立国語研究所(1990)：『敬語教育の基本問題(上、下)』、大蔵省印刷局。
- 徐向揆(1992)：『基礎朝鮮語 一会話編一』(大学用教科書)、白帝社。
- 曾我祐典(1989)：「一般教育課程におけるフランス語の総合的能力を養成する教授プログラムの研究」(1988年度研究プロジェクト報告)、『総研ジャーナル』56、pp.20-21、関西学院大学。
- (1992)：『フランス語における状況の表現法』、白水社。
- (1993a)：『ことばのしくみ フランス語』(大学用教科書)、白水社。
- (1993b)：「フランス語文法の教授プロジェクトの研究」(1992年度研究プロジェクト報告)、『総研ジャーナル』63、pp.60-62、関西学院大学。
- (1994)：「フランス語運用能力を養う文法教育」、『人文論究』44-1、関西学院大学文学部、pp. 81-92。
- 曾我祐典・池貞姫・東浦弘樹(1994)：『朝鮮語 '94』(大学用教科書)、朝鮮語教授法研究会。
- 高島淑郎(1993)：『書いて覚える初級朝鮮語』(大学用教科書)、白水社。
- 塚本勲他(1989)：『新しい朝鮮語』(大学用教科書)、白帝社。
- 土井隆広(1992)：「フランス語の待遇表現について」、『年報・フランス研究』26、関西学院大学文学部フランス文学科、pp.27-39。
- 西村淳子(1993)：「フランス語の丁寧語法 対人関係の語用論一」、『フランス語とはどういう言語か』、駿河台出版社、pp.263-291。
- 野間秀樹(1988)：『Kil 朝鮮語への道』(大学用教科書)、有明学術出版社。
- 韓美卿(1988)：「韓国語の敬語の用法」、『講座 日本語学12 外国語との対照III』、明治書院、pp. 185-198。
- 文京洙(1992)：『ハンゲル教本 基礎から読解まで』(大学用教科書)、新幹社。
- 油谷幸利(1988)：『ハンゲルの基礎』(大学用教科書)、大修館。
- (1993)：『ハンゲル初級』(大学用教科書)、大修館。
- YOON, A. (1989)： *Les attitudes interlocutives: les formes de politesse en français et en coréen*, (パリ) 第4大学博士論文、未刊。